

志成館では館長が「志成館のようなところで仕事ができ、人生が過ごせたら、こんな贅沢な人生はない」といつも言っていますし「君たちの様な子供たちと過ごせることほど楽しいことはない」といつも言っています。しかしこれと異なって「学校の先生はとて大変だ」と言い、「学校の先生を尊敬して大切にしてほしい」といつも生徒に話しています。ごく最近の毎日新聞の社説と記事です。しっかり読んで「先生の立場」も理解してください。そしてまず「部活」の面から先生を救ってあげることです。館長の友人知人そして教え子にたくさんの先生がいます。「教育」ほど実りがある仕事はありませんし、先生は全てが「教育が好き」なのです。「大学を含めて先生を大切に」というのが志成館からの悲痛な願いです。



社説

小中の教員、週60時間勤務

先生の悲鳴が聞こえる

ronsetu@mainichi.co.jp

多忙は限界を超える状況ではないだろうか。

文部科学省が小中学校の教員の勤務実態調査を公表した。全国の公立小中学校から抽出した約1万9000人の結果で、10年前との比較も示された。

小中学校とも勤務時間は伸びている。1週間の勤務時間は小学校が4時間余り伸びて57時間25分、中学校でも5時間余り長くなり63時間18分だ。忙しさに拍車がかかっている。

週約60時間もの労働実態だ。いわゆる「過労死ライン」に達する計算となる週60時間以上の勤務は、小学校で3人に1人、中学では6割近くに上っている。

国際機関の調査では、先進諸国の中学教員は平均すると週約38時間の勤務で、日本は突出して長い。長時間勤務の大きな要因は、授業時間の増加と部活動指導だ。

いわゆる「はとり教育」で学習内容が削減された学習指導要領が改定され、小学校低学年では週2コマ、それ以上は週1コマ授業が増えた。準備のための時間や成績をつける時間も増える。少人数指導が広まり、先生が受け持つ授業も多くなった。中学では休日の部活動の指導時間が倍増し、平均で2時間を超えている。大会等に向けた指導でつきつきりになっている姿も浮かび上がる。年間で5000人前後もの教員が

精神疾患で休職しているのが現状だ。教員増とともに、外部の支援や仕事内容の見直しが不可欠だ。

文科省も、スクールカウンセラーや部活動指導員を学校職員と位置付けるなど、福祉・心理や部活動の専門家を学校に導入することで見直しを図ろうとしている。だが、まだ緒に就いたばかりだ。この流れをさらに加速させる必要がある。

外部への報告書作りなどの事務作業の多さも相変わらずだ。教育委員会なども教員の負担になる調査を実施していないか、見直す必要がある。学校自身も行事や研修、会合を精査すべきだ。

2020年度からは小学校で英語が教科として加わり、討論などで能動的に学ぶアクティブ・ラーニングも導入される。さらに忙しくなる。先生が疲れ果てていては、教育の質も低下する。負担軽減は日本の将来に向けた喫緊の課題だ。

中学教諭6割過労死ライン

週勤務時間10年で5時間増

文科省調査

文部科学省が28日に2016年度の教員勤務実態調査結果（速報値）を公表し、国が示す「過労死ライン」に達する週60時間以上の「残業」をした教諭は中学校で57・7%、小学校で33・5%に上ることが明らかになった。部活動や授業の増加が主な要因。1週間の平均勤務時間は、06年度の前回調査に比べ、中学校教諭で5時間12分、小学校教諭で4時間9分増えた。現場からは「ひどいのは電通だけじゃない」と悲鳴が上がっている。【伊澤拓也】

調査は16年10～11月、全国の公立小中学校400校の教員約2万人に連続7日間の勤務状況を尋ね、校長・教頭、教諭など全ての職種で10年前より勤務時間が増え、1週

間あたりの平均勤務時間は中学校教諭で63時間18分、小学校教諭で57時間25分。中学校教諭が土日の部活動に關わる時間は2時間10分と、10年前の1時間6分から倍になった。

職種別で1週間の勤務時間が最も長かったのは小中とも副校長・教頭で、中学校が63時間36分（06年度比2時間27分増）、小学校が

63時間34分（同4時間29分増）だった。管理職としての事務作業やトラブル対応が増えているのが要因という。

教諭の年齢構成も変化した。30歳以下は小学校で25・9%、中学校で24・4%と、10年前

より10～12%増えた。若い教諭はベテランに比べて授業準備に時間がかかり、部活動も任されることも多い。

多忙化の背景には、授業時間の増加がある。旧学習指導要領に

基づく教育課程（カリキュラム）だった06年度に比べ、小学1～2年で授業時間（1単位で45分）が2時間、科化に伴い、小学3～6年と中学の6年でさらに1時間増

えた。文科省は前回調査以降、「回答に時間がかかると指摘された各種」を整理したりした。しかし、今回の調査では教員の多忙化に歯止めがかかっていない状況が浮き彫りになった。

おとつわ は「は休みました。」

★教員生活11720hr
www.nhk.or.jp/11720hr

第33回の答え

←左へ続く